西二葉町遺跡発掘通信

No. 6
令和６年
11月号

発掘調査中に発生した事故について

先日、十月二十九日の午前九時三十分頃、発掘調査に伴って重機で掘削作業を開始した際、誤って水道管（上水）を損傷、出水させる事故を起こしてしまいました。このことにより、当日午後からの学校運営がすべて停止になってしまうなど、大きな支障をきたすこととなり、明和高等学校の生徒さん、教職員の皆さま、さらにはご父兄の皆さまと、学校関係の皆さまに、広くご迷惑をおかけする事態となってしまいました。紙面で誠に恐縮ですが、心よりお詫び申し上げます。

愛知県埋蔵文化財センターでは、明和高等学校様からの指導のもと、本件事故の発生原因とその対策についてまとめたところです。それを踏まえて、今後このような事故が二度と起こらないように細心の注意を払いつつ、かつ有事の際には、関係機関と連絡を密にし迅速な対応に当たる所存です。

誠に申し訳ありませんでした。

愛知県埋蔵文化財センター　センター長　伊藤尚巳

犬山城白帝文庫友の会ご来跡

先日、十月十日（木）の午後、犬山城白帝文庫理事長・歴史博物館館長以下、友の会の皆さまが、西二葉遺跡の発掘現場にお越しになりました。外の発掘現場では屋敷建物にご興味を持って頂いたほか、出土遺物では、やはり家紋入りの軒丸瓦や犬山焼、焼塩壷、さらには今回の発掘調査で出土した、シカや大型鳥類の骨について、大変興味を示されました。成瀬家と尾張徳川家との関係など、興味深いお話も伺うことができました。（川添和暁）

焼塩壷について

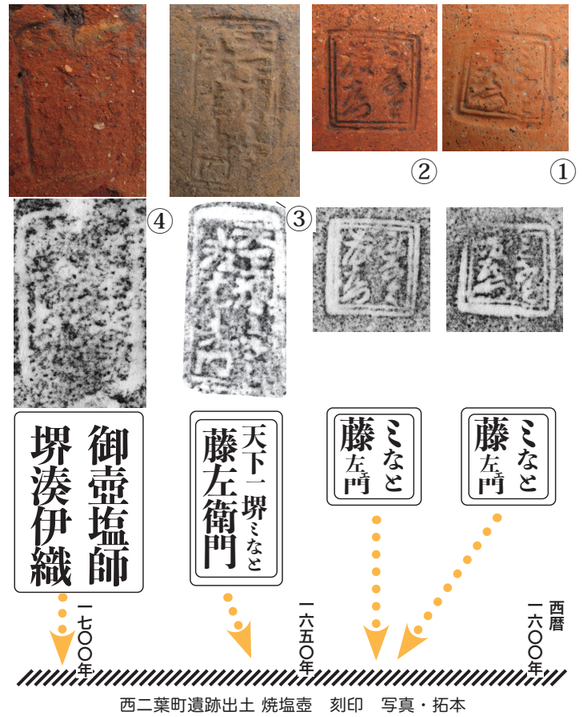
江戸時代を代表する遺物に焼塩壷があります。素焼き（土師質）の容器で、一見すると粗雑な容器に見えます。焼塩壷は、食卓塩などに精製するための容器で、粗塩をこの容器に入れて、焼返すことで苦塩を取り除くことを目的としています。器の表面・内面を見ると、使用によって二度焼けした状態となっているものが多く、中には写真の⑤のようにピンク色に発色しているものもあります。焼塩壷には、表面に刻印が押されているものがあり、泉州湊系、泉州麻生系、播磨系など、近畿地域の地名と、生産業者などが刻まれています。この刻印の変遷は、文献史料の記録などから、細かい実年代との対比ができるとされています。

粗塩からの精製は、当時の焙烙鍋（現在のフライパンに当たります）でも可能ではありましたが、食卓塩についていわゆるブランド品が流通していたことが注目されます。特に、江戸時代前半においては、武家屋敷や寺社での出土に限られており、当時の上級階級の食卓に供されていたことが分かります。

西二葉遺跡で出土した焼塩壷　①の器高は 10.1cm
写真にある７点のうち、①～④に刻印が認められました。

焼塩壷は容器の作られ方や刻印の変化が早く、使用後にすぐに捨てられたりすることから、発掘調査において出土した遺構の年代を推定する根拠となるいい資料とされています。西二葉町遺跡出土の資料では、上段写真①～④で刻印が確認できており、これらは下段図のように整理できそうです。④は残念ながら器面の残りが悪く、そのままでの文字の判読は難しいところです。しかし、痕跡をたどると、二行に渡っていることが分かり、刻印自体の大きさ、さらには容器自体の作られ方からみて、刻印の内容を推定することができました。（川添和暁）

西二葉町遺跡発掘通信
No. 6
令和６年11月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Instagram https://www.instagram.com/aichimaibun/
X https://twitter.com/aich
印刷・協力　安西工業株式会社
あいち埋文



西二葉町遺跡出土 焼塩壷　刻印　写真・拓本

十月実施の調査について

十月は、音楽棟エリア24B区の中でも最も面積の広い24Bb区で、近世の整地層（盛土）を除去し、その下で確認できた遺構の調査を実施しました。

この段階の調査では、新しい順に、近世（江戸時代）、戦国期～近世初頭、中世前半以降と、大きく三つの時期の遺構を見ることができました。三頁の図では、各時期別に遺構に着色をしてみました。この図から明らかなように、この三つの時期では、それぞれ土地利用の際の軸線が異なっていた様子がうかがえます。

近世（江戸時代）では、成瀬家屋敷関連の遺構で、柱穴跡や大型土坑、井戸、常滑焼大甕の埋設遺構などが調査されました。柱穴跡の配列を見ると、整地層上で調査された柱穴跡の配列と同一方向で展開しており、江戸時代を通じて、屋敷建物の方向に大きな変化がなかったものと考えられます。柱穴では扁平で大きな河原石を根石にしているものが多いですが、今回、柱の角材の跡がそのまま残されている柱穴跡が確認されました。この柱穴では根石を使わなかったようです（①）。深くて大きい大型土坑が、24Ba区・24Bb区で数多く見つかっています。大量の遺物が廃棄された状態で出土することからゴミ穴であった訳ですが（②）、この調査区では、階段を作り出しているものを確認しました（③）。これは地下室と言われる倉庫と考えられます。大型土坑としているもののいくかつは、もともとはこのような地下室であった可能性が高いと思われます。

戦国期～近世初頭の遺構では、やや深い溝を数条確認しています。方形区角を呈し当時の屋敷地を区画する溝と考えられます。中には暗渠（地下水路）構造を示すものもありました（②）。

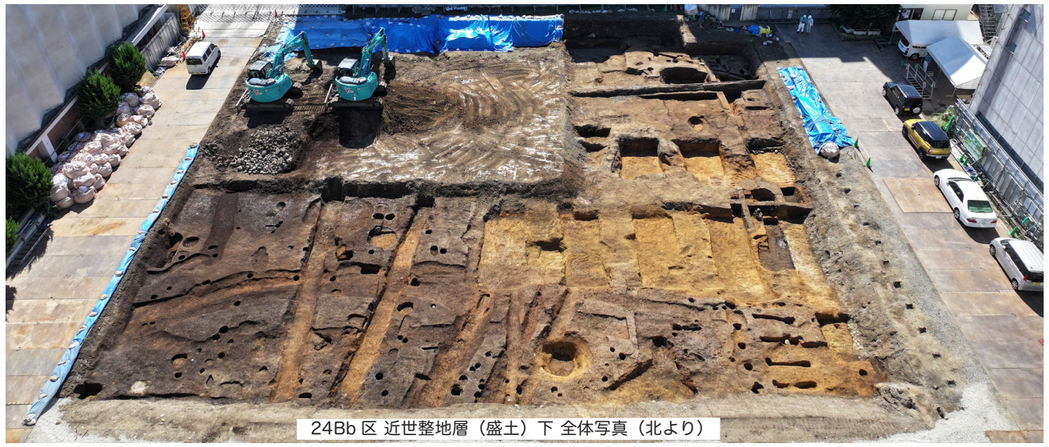
調査区東側を中心に、近世整地層と地盤の名古屋台地との間には、灰褐色～黒褐色を呈する粘土層が堆積しています。この層では古墳時代の須恵器から中世前半（鎌倉・室町時代）の陶器片が細片化した状態で出土します。この層には沈鉄粒が多く含まれている上、撹拌された様子も見られます。このことから、この堆積層は耕作に関係する堆積層ではないかと考えられます。見つかっている溝も、耕作に関係する導水などの役割を担っていたものと思われます。（川添和暁）

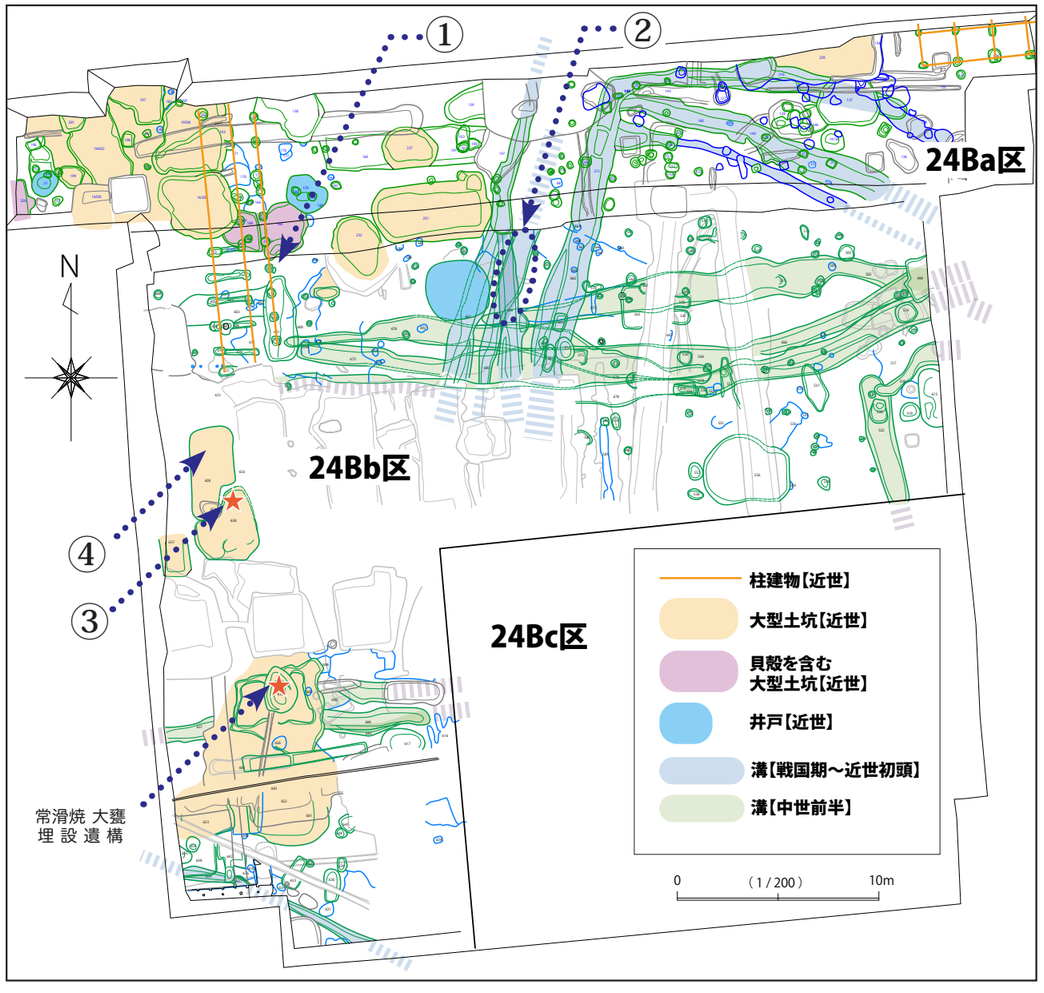
柱（角材）痕跡のある柱穴跡【近世】

暗渠（地下水道）構造を有する溝【戦国期～近世初頭か】

大型土坑内遺物出土状況【近世】

大型土坑【 地下室（ちかむろ）】【近世 】


24Bb 区 近世整地層（盛土）下 全体写真（北より）



24Bb 区　近世整地層（盛土）下　遺構全体図　（丸数字は２頁写真番号と一致）